

悟淨出世

中島敦

青空文庫

寒蝉敗柳に鳴き大火西に向かいて流るる秋のはじめになりければ心細くも三蔵は二人の弟子にいざなわれ嶮難を凌ぎ道を急ぎたもうに、たちまち前面に一条の大河あり。大波湧返りて河の広さそのいくばくという限りを知らず。岸上りて望み見るときかたわらに一つの石碑あり。上に流沙河の三字を篆字にて彫付け、表に四行の小楷字あり。

はちひやくりゆうさのかい
八百流沙界

さんぜんじやくすいふかし
三千弱水深

がもうただよいかばず
鷺毛飄不起

ろかそこによとみてしずむ
蘆花定底沈

そのころ流沙河の河底に栖んでおった妖怪の総数およそ一万三千、なかで、渠ばかり心弱きはなかつた。渠に言わせると、自分は今までに九人の僧侶を啖つた罰で、それから九人の骸顱が自分の頸の周囲について離れないのだそうだが、他の妖怪らには誰にもそんな骸顱は見えなかつた。「見えない。それは儻の気の迷いだ」と言うと、渠は信じがたげな眼で、一同を見返し、さて、それから、なぜ自分はこうみんなと違うんだろうといったふうな悲しげな表情に沈むのである。他の妖怪らは互いに言合うた。「渠は、僧侶どころか、ろくに人間さえ啖つたことはないだろう。誰もそれを見た者がいないのだから。鮒やぎこを取つて喰つているのなら見たこともあるが」と。また彼らは渠に綽名して、独言悟浄と呼んだ。渠が常に、自己に不安を感じ、身を切刻む後悔に苛まれ、心の中で反芻されるその哀しい自己苛責が、つい独り言となって洩れるがゆえである。遠方から見ると小さな泡が渠の口から出ているにすぎないようなときでも、実は彼が微かな声で呟いているのである。「俺はばかだ」とか、「どうして俺はこうなんだろう」とか、「もうだめだ。俺は」とか、ときとして「俺は墮天使だ」とか。

当時は、妖怪に限らず、あらゆる生きものはすべて何かの生まれかわりと信じられてお

った。悟浄がかつて天上界で靈霄殿の捲簾大将を勤めておつたとは、この河
 底で誰言わぬ者もない。それゆえすこぶる懐疑的な悟浄自身も、ついにはそれを信じてお
 るふりをせねばならなんだ。が、実をいえば、すべての妖怪の中で渠一人はひそかに、
 生まれかわりの説に疑いをもっておつた。天上界で五百年前に捲簾大将をしておつた者が
 今の俺になつたのだとして、さて、その昔の捲簾大将と今のこの俺とが同じものだといっ
 ていいのだろうか？ 第一、俺は昔の天上界のことを何一つ記憶してはおらぬ。その記憶
 以前の捲簾大将と俺と、どこが同じなのだ。身体が同じなのだろうか？ それとも魂が、
 だろうか？ ところで、いったい、魂とはなんだ？ こうした疑問を渠が洩らすと、妖
 怪どもは「また、始まつた」といつて嗤うのである。あるものは嘲弄するように、
 あるものは憐愍の面持ちをもつて「病氣なんだよ。悪い病氣のせいなんだよ」と言うた。

事実、渠は病氣だつた。

いつのころから、また、何が因でこんな病氣になつたか、悟浄はそのどちらをも知ら
 ぬ。ただ、気がついたらそのときはもう、このような厭わしいものが、周囲に重々しく立
 罩めておつた。渠は何をするのもいやになり、見るもの聞くものがすべて渠の気を沈ませ、

何事につけても自分が厭わしく、自分に信用がおけぬようになってしもうた。何日も何日も洞穴ほらあなに籠こもって、食を摂とらず、ギョロリと眼ばかり光らせて、渠は物思いに沈んだ。不意に立上がってその辺を歩き廻り、何かブツブツ独り言をいいたまた突然すわる。その動作の一つ一つを自分では意識しておらぬのである。どんな点かはつきりすれば、自分の不安が去るのか。それさえ渠には解わからなんだ。ただ、今まで当然として受取ってきたすべてが、不可解な疑わしいものに見えてきた。今まで纏まとまった一つのことと思われたものが、バラバラに分解された姿で受取られ、その一つの部分部分について考えているうちに、全体の意味が解らなくなつてくるといったふうだった。

医者でもあり・占星師せんせいしでもあり・祈祷者きとうしやでもある・一人の老いたる魚怪が、あるとき悟浄を見てこう言うた。「やれ、いたわしや。因果いんがな病にかかったものじや。この病にかかったが最後、百人のうち九十九人までは惨みじめな一生を送らねばなりません。元来、我々の中にはなかつた病氣じやが、我々が人間を咋くうようになつてから、我々の間にもごくまれに、これに侵される者が出てきたのじや。この病に侵された者はな、すべての物事を素直に受取ることができぬ。何を見ても、何に出会うても『なぜ?』とすぐに考える。究極の・正しょうしんしょうめい・真正しょうしんしょうめい・銘めいの・神様だけがご存じの『なぜ?』を考えようとするのじや。そ

んなことを思うては生き物は生きていけぬものじゃ。そんなことは考えぬというのが、この世の生き物の間の約束ではないか。ことに始末に困るのは、この病人が『自分』というものに疑いをもつことじゃ。なぜ俺は俺を俺と思うのか？ 他ほかの者を俺と思うてもさしつかえなかるうに。俺とはいったいなんだ？ こう考えはじめるのが、この病のいちばん悪い徴ちようこう候候じゃ。どうじゃ。当たりましたろうがの。お気の毒じゃが、この病には、薬もなければ、医者もない。自分で治なおすよりほかはないのじゃ。よほどの機縁に恵まれぬかぎり、まず、あんたの顔色のはれる時はありますまいて。」

一一

文字の発明は疾とくに人間世界から伝わって、彼らの世界にも知られておったが、総じて彼らの間には文字を軽けいべつ蔑蔑する習慣があつた。生きておる智慧ちえが、そんな文字などという死物で書留められるわけがない。（絵になら、まだしも画かけようが。）それは、煙をその形のままに手で執とらえようとするにも似た愚かさであると、一般に信じられておった。したがって、文字を解することは、かえって生命力衰退の徴しるし候候として斥しりぞけられた。悟浄が日

ごろ憂鬱ゆううつなものも、畢竟ひつきよう、渠かれが文字を解するために違いないと、妖怪ばけものどもの間では思われておった。

文字は尚とことばれなかつたが、しかし、思想が軽んじられておったわけではない。一万三千の怪物の中には哲学者も少くはなかつた。ただ、彼らの語彙ごいははなはだ貧弱だったので、最もむずかしい大問題が、最も無邪気な言葉でもって考えられておった。彼らは流沙河りゅうががの河底にそれぞれ考える店を張り、ために、この河底には一脈の哲学的憂鬱が漂うていたほどである。ある賢明な老魚は、美しい庭を買い、明るい窓の下で、永遠の悔いなき幸福について冥想めいそうしておった。ある高貴な魚族は、美しい縞しまのある鮮緑の藻もの蔭かげで、豎琴たてごとをかき鳴らしながら、宇宙の音楽的調和を讃たたえておった。醜く・鈍く・ばか正直な・それだけで、自分の愚かな苦悩を隠たそうともしない悟浄ごじようは、こうした知的な妖怪ばけものの間で、いい嬲なぶりものになった。一人の聡明そうめい、そんな怪物が、悟浄に向かい、真面目まじめくさつて言いうた。「真理とはなんぞや？」そして渠かれの返辞かへしをも待たず、嘲笑ちやうしやうを口辺に浮かべて言いうた。「大勝おおまたに歩み去つた。また、一人の妖怪——これは※魚いさなの精だつたが——は、悟浄の病を聞いて、わざわざ訪ねて来た。悟浄の病因が「死への恐怖」にあると察して、これを晒わらおうがためにやって来たのである。「生ある間は死なし。死到いたれば、すでに我なし。また、

何をか懼れん。」というのがこの男の論法であった。悟浄はこの議論の正しさを素直に認めた。というのは、渠自身けつして死を怖れていたのではなかったし、渠の病因もそこにはなかったのだから。晒おうとしてやって来た※魚の精は失望して帰って行った。

妖怪の世界にあつては、身体と心とが、人間の世界におけるほどはつきりと分かれてはいなかったので、心の病はただちに烈しい肉体の苦しみとなつて悟浄を責めた。堪えがなくなつた渠は、ついに意を決した。「このうえは、いかに骨が折れようと、また、いかに行く先々で愚弄され晒われようと、とにかく一応、この河の底に栖むあらゆる賢人、あらゆる医者、あらゆる占星師に親しく会つて、自分に納得のいくまで、教えを乞う」と。

渠は粗末な直綴を纏うて、出発した。

なぜ、妖怪は妖怪であつて、人間でないか？ 彼らは、自己の属性の一つだけを、極度に、他との均衡を絶して、醜いまでに、非人間的なまでに、発達させた不具者だからである。あるものは極度に貪食で、したがって口と腹がむやみに大きく、あるものは

極度に淫蕩で、したがってそれに使用される器官が著しく発達し、あるものは極度に純潔で、したがって頭部を除くすべての部分がすっかり退化しきっていた。彼らはいずれも自己の性向、世界観に絶対に固執して、他との討論の結果、より高い結論に達するなどということを知らなかった。他人の考えの筋道を辿るにはあまりに自己の特徴が著しく伸長しすぎていたからである。それゆえ、流沙河の水底では、何百かの世界観や形而上学が、けつして他と融和することなく、あるものは穏やかな絶望の歡喜をもって、あるものは底抜けの明るさをもつて、あるものは願望はあれど希望なき溜息をもつて、揺動く無数の藻草のようにゆらゆらとたゆとうておつた。

三

最初に悟浄が訪ねたのは、黒卵道人として、そのころ最も高名な幻術の大家であつた。あまり深くない水底に累々と岩石を積重ねて洞窟を作り、入口には斜月三星洞の額が掛かつておつた。庵主は、魚面人身、よく幻術を行のうて、存亡自在、冬、雷を起こし、夏、氷を造り、飛者を走らしめ、走者を飛ばしめるといふ噂である。悟

浄はこの道人に三月み仕えた。幻術などどうでもいいのだが、幻術を能くするくらいなら真しん人じんであろうし、真人なら宇宙の大道を会得えとくして、渠かれの病を癒いやすべき智慧ちえをも知つていようと思われたからだ。しかし、悟浄は失望せぬわけにかなかつた。洞ほらの奥で巨鼈きよじょうの背に座つた黒卵道こくらんどうじん人も、それを取囲む数十の弟子たちも、口にするここといえば、すべて神変しんべん不可思議ふかしぎの法術のことばかり。また、その術を用いて敵を欺あざむこうの、どこそこの宝を手に入れようのという実用的な話ばかり。悟浄の求めるような無用の思索の相手をしてくれるものは誰一人としておらなんだ。結局、ばかにされ晒わらいものになつた揚句あげく、悟浄は三星洞を追出された。

次に悟浄が行つたのは、沙虹隱士しゃこういんしのところだつた。これは、年を経た蝦えびの精で、すでに腰が弓のように曲がり、半ば河底の砂に埋もれて生きておつた。悟浄はまた、三月みの間、この老隠士に侍して、身の廻まわりの世話を焼きながら、その深しん奥おうな哲学に触れることができた。老いたる蝦の精は曲がつた腰を悟浄にさすらせ、深刻な顔つきで次のように言つた。「世はなべて空むなしい。この世に何か一つでも善よきことがあるか。もしありとせば、それは、この世の終わりがいずれは来るであろうことだけじゃ。別にむずかしい理窟りくつを考へるまで

もない。我々の身の廻りを見るがよい。絶えざる変転、不安、懊惱、恐怖、幻滅、鬪争、倦怠。まさに昏々昧々紛々若々として帰するところを知らぬ。我々は現在という瞬間の上にだけ立つて生きている。しかもその脚下の現在は、ただちに消えて過去となる。次の瞬間もまた次の瞬間もそのとおり。ちようど崩れやすい砂の斜面に立つ旅人の足もとが一足ごとに崩れ去るようだ。我々はどこに安んじたらよいのだ。停まろうとすれば倒れぬわけにいかぬゆえ、やむを得ず走り下り続けているのが我々の生じや。幸福だと？ そんなものは空想の概念だけで、けつして、ある現実的な状態をいうものではない。果敢ない希望が、名前を得ただけのものじや。」

悟浄の不安げな面持ちを見て、これを慰めるように隱士は付加えた。

「だが、若い者よ。そう懼れることはない。浪にさらわれる者は溺れるが、浪に乗る者はこれを越えることができる。この有為転変をのり超えて不壊不動の境地に到ることもできぬではない。古の真人は、能く是非を超え善悪を超え、我を忘れ物を忘れ、不死不生の域に達しておつたのじや。が、昔から言われておるように、そういう境地が楽しいものだと思うたら、大間違い。苦しみもない代わりには、普通の生きものの有つ楽しみもない。無味、無色。誠に味気ないこと蟬のごとく砂のごとしじや。」

悟浄は控えめに口を挾はさんだ。自分の聞きたいと望むのは、個人の幸福とか、不動心ふどうしんの確立とかいうことではなくて、自己、および世界の究極の意味についてである、と。隠士めやに たまは目脂めやにの溜たまつた眼をしょぼつかせながら答えた。

「自己だと？ 世界だと？ 自己を外ほかにして客観世界など、在ると思うのか。世界とはな、自己が時間と空間との間に投射まぼろしした幻じや。自己が死ねば世界は消滅しますわい。自己が死んでも世界が残るなどとは、俗も俗、はなはだしい謬びゆうけん見じや。世界が消えても、正体わかの判らぬ・この不思議な自己というやつこそ、依然として続くじやろうよ。」

悟浄が仕えてからちようど九十日めの朝、数日間続いた猛烈な腹痛と下痢げりののちに、この老隠いんじや者は、ついに斃たおれた。かかる醜みにくい下痢と苦しい腹痛とを自分に与えるような客観世界を、自分の死によつて抹殺まつざつできることを喜びながら……。

悟浄ねんごは懇ろねんごにあとをとぶらい、涙とともに、また、新しい旅に上った。

尊うわさによれば、坐忘ざぼう先生は常に坐禪ざぜんを組んだまま眠り続け、五十日に一度目を覚さまされるだけだという。そして、睡眠中の夢の世界を現実と信じ、たまに目覚めているときは、それを夢と思つておられるそう。悟浄がこの先生をはるばる尋ね来たとき、やはり先生は

睡ねむつておられた。なにしろ流沙河りゅうさがで最も深い谷底で、上からの光もほとんど射さして来ない有様ゆえ、悟浄も眼の慣れるまでは見定めにくかったが、やがて、薄暗い底の台の上に結跏趺坐けつかふざしたまま睡ねむっている僧そうぎ形がぼんやり目前に浮かび上がってきた。外からの音も聞こえず、魚類もまれにしか来ない所で、悟浄もしかたなしに、坐忘先生の前に坐すわつて眼を瞑つむつてみたら、何かジーンと耳が遠くなりそうな感じだった。

悟浄が来てから四日めに先生は眼を開いた。すぐ目の前で悟浄があわてて立上がり、礼らい拜はいをするのを、見るでもなく見ぬでもなく、ただ二、三度瞬まばたきをした。しばらく無言の対坐たいざを続けたのち悟浄は恐る恐る口をきいた。「先生。さっそくでぶしつけでございますか、一つお伺いいたします。いったい『我』とはなんでございましょうか?」「咄とつ! 秦しん時の※轆たぐら鑽くさん!」という烈しい声とともに、悟浄の頭はたちまち一棒を喰くらった。渠かれはよろめいたが、また座に直り、しばらくして、今度は十分に警戒しながら、先刻の問いを繰返した。今度は棒が下おりて来なかつた。厚い唇くちびるを開き、顔も身体もどこも絶対に動かさずに、坐忘先生が、夢の中でのような言葉で答えた。「長く食を得ぬときに空腹を覚えるものが憊おまじや。冬になって寒さを感じるものが憊おまじや。」さて、それで厚い唇くちびるを閉じ、しばらく悟浄ぶじようのほうを見ていたが、やがて眼を閉じた。そうして、五十日間それを開かなか

つた。悟浄は辛抱強く待った。五十日めにふたたび眼を覚ました坐忘先生は前に坐っている悟浄を見て言った。「まだいたのか？」悟浄は謹しんで五十日待った旨を答えた。

「五十日？」と先生は、例の夢を見るようなトロリとした眼を悟浄に注いだ。じつとそのままひと時ほど黙っていた。やがて重い唇が開かれた。

「時の長さを計る尺度が、それを感じる者の実際の感じ以外にないことを知らぬ者は愚かじや。人間の世界には、時の長さを計る器械ができたそうじやが、のちのち大きな誤解の種を蒔くことじやろう。大椿の寿も、朝菌の夭も、長さに変わりはないのじや。時とはな、我々の頭の中の一つの装置じやわい」

そう言終わると、先生はまた眼を閉じた。五十日後でなければ、それがふたたび開かれることがないであろうことを知っていた悟浄は、睡れる先生に向かって恭々しく頭を下げてから、立去った。

「恐れよ。おののけ。しかして、神を信ぜよ。」

と、流沙河の最も繁華な四つ辻に立つて、一人の若者が叫んでいた。

「我々の短い生涯が、その前とあととに続く無限の大永劫の中に没入していること

を思え。我々の住む狭い空間が、我々の知らぬ・また我々を知らぬ・無限の大広表の中に投込まれていることを思え。誰か、みずからの姿の微小さに、おののかずにいられるか。我々はみんな鉄鎖に繋がれた死刑囚だ。毎瞬間ごとにその中の幾人かずつが我々の面前で殺されていく。我々はなんの希望もなく、順番を待っているだけだ。時は迫っているぞ。その短い間を、自己欺瞞と酩酊とに過ごそうとするのか？ 呪われた卑怯者め！ その間を汝の惨めな理性を恃んで自惚れ返っているつもりか？ 傲慢な身の程知らずめ！

噴嚏一つ、汝の貧しい理性と意志とをもってしては、左右できぬではないか。」
白哲の青年は頬を紅潮させ、声を哽らして叱咤した。その女性的な高貴な風姿のどこに、あのような激しさが潜んでいるのか。悟浄は驚きながら、その燃えるような美しい瞳に見入った。渠は青年の言葉から火のような聖い矢が自分の魂に向かって放たれるのを感じた。

「我々の為しうるのは、ただ神を愛し己を憎むことだけだ。部分は、みずからを、独立した本体だと自惚れてはならぬ。あくまで、全体の意志をもって己の意志とし、全体のためのみ、自己を生きよ。神に合するものは一つの霊となるのだ」

確かにこれは聖く優れた魂の声だ、と悟浄は思い、しかし、それにもかかわらず、自分

の今饑うえているものが、このような神の声でないことをも、また、感ぜずにはいられなかった。訓言おしえは葉おしえのようなもので、瘡おこりを病む者の前に腫はれものの葉をすすめられてもしかたがない、と、そのようなことも思うた。

その四つ辻つじから程遠ろぼうからぬ路傍ろぼうで、悟浄は醜こじきい乞食こじきを見た。恐ろしい尪せむしで、高く盛上せまがつた背骨せぼねに吊つられて五臟ござうはすべて上に昇あつてしまい、頭の頂は肩よりずつと低く落込おいで、頤おとがは臍へそを隠かくすばかり。おまけに肩から背中にかけて一面に赤く爛ただれた腫物はれものが崩れて、いる有様に、悟浄は思わず足を停とめて溜息ためいきを洩もらした。すると、蹲うずくまっているその乞食こじきは、頸くびが自由にならぬままに、赤く濁にごった眼玉めだまをじろりと上向け、一本しかない長い前歯まへばを見せてニヤリとした。それから、上に吊上つりあがった腕をブラブラさせ、悟浄の足もとまでよるめいて来ると、渠かれを見上げて言った。

「僭越せんえつじゃな、わしを憐れあわれみなさるとは。若いかたよ。わしを可哀かわいそう想なやつと思うのかな。どうやら、お前さんのほうがよほど可哀想に思えてならぬが。このような形にしたからとて、造物主をわしが怨うらみどるとでも思っていないさるのじゃろう。どうしてどうして、逆に造物主を讚ほめとるくらいですわい、このような珍しい形かたちにしてくれたと思うてな。こ

れからも、どんなおもしろい^{かつこ}恰好になるやら、思えば楽しみのようなでもある。わしの左^{ひじ}臂が鶏になったら、時を告げさせようし、右臂が弾き弓^{はじ}になったら、それで^{ふくろう}でもとって^{あぶ}炙り肉をこしらえようし、わしの尻^{しり}が車輪になり、魂が馬にでもなれば、こりやこのうえなしの乗物で、^{ちようほう}重宝じやろう。どうじゃ。驚いたかな。わしの名はな、子輿^{しよ}というてな、子祀^{しし}、子犁^{しれい}、子来^{しらい}という三人の^{ばくぎやく}莫逆の友がありますじゃ。みんな女^{じよ}※氏の弟子で、ものの形を超えて不生不死^{ふしょうふしきよう}の境に入ったれば、水にも濡^ぬれず火にも焼^やけず、寝て夢見ず、覚めて憂^{うれ}いなきものじゃ。この間も、四人で笑うて話したことがある。わしらは、無^{かしら}もって首とし、生をもつて背とし、死をもつて尻^{しり}としとるわけじゃとな。アハハハ……。

一
気味の悪い笑い声にギョツとしながらも、悟浄は、この乞食こそあるいは真^{しんじん}人というものかもしれないと思うた。この言葉が本^{ほんもの}物だとすればたいしたものだ。しかし、この男の言葉や態度の中にどこか誇示的なものが感じられ、それが苦痛を忍んでむりに壮語しているのではないかと疑わせたし、それに、この男の醜^{うみに}さと膿^{うみ}の臭^{くさ}さとが悟浄に生理的な反^は撥^{はんぱつ}を与えた。渠^{かれ}はだいぶ心を惹^ひかれながらも、ここで乞食^{こしき}に仕えることだけは思い止まった。ただ先刻の話の中にあつた女^こ※氏とやらについて教えを乞^こいたく思うたので、その

ことを洩らした。

「ああ、師父か。師父はな、これより北の方、二千八百里、この流沙河が赤水・墨水と落合うあたりに、庵を結んでおられる。お前さんの道心さえ堅固なら、ずいぶんと、教訓も垂れてくだされよう。せっかく修業なさるがよい。わしからもよろしくと申し上げてくだされい。」と、みじめな佝僂は、尖った肩を精一杯いからせて横柄に言うた。

四

流沙河と墨水と赤水との落合う所を目指して、悟浄は北へ旅をした。夜は葦間に仮寝の夢を結び、朝になれば、また、果知らぬ水底の砂原を北へ向かって歩み続けた。楽しげに銀鱗を翻えす魚族どもを見ては、何故に我一人かくは心怡しまぬぞと思ひ侘びつつ、渠は毎日歩いた。途中でも、目ぼしい道人修験者の類は、剩さずその門を叩くことにしていた。

貪食と強力とをもつて聞こえる虻髯鮎子を訪ねたとき、色あくまで黒く、逞し

げな、この鯰なますの妖怪ばけものは、長鬣ちようぜんをしごきながら「遠き慮おもんばかりのみすれば、必ず近き憂うれいあり。達人たつじんは大観せぬものじゃ。」と教えた。「たとえばこの魚じゃ。」と、鮎子ねんしは眼前を泳ぎ過ぎる一尾の鯉こいを掴つかみ取ったかと思うと、それをムシヤムシヤかじりながら、説くのである。「この魚だが、この魚が、なぜ、わしの眼の前を通り、しかして、わしの餌えとならねばならぬ因縁いんねんをもっているか、をつくづくと考えてみることは、いかにも仙哲せんてつにふさわしき振舞いじやが、鯉を捕える前に、そんなことをくどくどと考えておった日には、獲物は逃げて行くばかりじや。まずすばやく鯉を捕え、これにむしやぶりついてから、それを考えても遅うはない。鯉は何故なにゆえに鯉なりや、鯉と鮎ふなとの相異についての形けいじ而上学的考察じしよう、等々の、ばかばかしく高尙こうしような問題にひつかかつて、いつも鯉を捕えそこなう男じやろう、お前はまえ。おまえの物憂ものうげな眼の光が、それをはつきり告げとるぞ。どうじや。「確かにそれに違いないと、悟浄は頭を垂れた。妖怪はそのときすでに鯉を平げてしまい、なお貪婪どんらんそうな眼つきを悟浄のうなだれた頸筋くびすじに注そそいでおったが、急に、その眼が光り、咽喉のどがゴクリと鳴った。ふと首を上げた悟浄は、咄嗟とつさに、危険なものを感じて身を引いた。妖怪の刃のような鋭い爪つめが、恐ろしい速さで悟浄の咽喉をかすめた。最初の一撃にしくじった妖怪の怒りに燃えた貪食どんしょく、食的な顔が大きく迫ってきた。悟浄は強

く水を蹴つて、泥煙を立てるとともに、愴惶と洞穴を逃れ出た。苛刻な現実精神をかの
 獐猛な妖怪から、身をもつて学んだわけだ、と、悟浄は顫えながら考えた。

隣人愛の教説者として有名な無腸公子の講筵に列したときは、説教半ばにしてこの
 聖僧が突然饑えに駆られて、自分の実の子（もつとも彼は蟹の妖精ゆえ、一度に無数の
 子供を卵からかえすのだが）を二、三人、むしやむしや喰べてしまったのを見て、仰
 天した。

慈悲忍辱を説く聖者が、今、衆人環視の中で自分の子を捕えて食った。そして、食い終
 わつてから、その事実をも忘れたるがごとくに、ふたたび慈悲の説を述べはじめた。忘れ
 たのではなくて、先刻の飢えを充たすための行為は、てんで彼の意識に上っていないかつた
 に相違ない。ここにこそ俺の学ぶべきところがあるのかもしれないぞ、と、悟浄はへん
 な理窟をつけて考えた。俺の生活のどこに、ああした本能的な没我的な瞬間があるか。渠
 は、貴き訓を得たと思ひ、跪いて拝んだ。いや、こんなふうにして、いちいち概念的な解
 釈をつけてみなければ気の済まないところに、俺の弱点があるのだ、と、渠は、もう一度
 思い直した。教訓を、罐詰にしないうで生のままに身につけること、そうだ、そうだ、と

悟浄は今一遍、拜をしてから、うやうやしく立去った。

蒲衣子の庵室は、変わった道場である。僅か四、五人しか弟子はいないが、彼らはいずれも師の歩みに倣うて、自然の秘鑰を探究する者どもであった。探求者というより、陶醉者と言ったほうがいいかもしれない。彼らの勤めるのは、ただ、自然を観て、しみじみとその美しい調和の中に透過することである。

「まず感じることです。感覚を、最も美しく賢く洗煉することです。自然美の直接の感受から離れた思考などとは、灰色の夢ですよ。」と弟子の一人が言った。

「心を深く潜ませて自然をごろんなさい。雲、空、風、雪、うす碧い氷、紅藻の揺れ、夜水中でこまかくきらめく珪藻類の光、鸚鵡貝の螺旋、紫水晶の結晶、石榴石の紅、螢石の青。なんと美しくそれらが自然の秘密を語っているように見えることでしょう。」彼の言うことは、まるで詩人の言葉のようだった。

「それなのに、自然の暗号文字を解くのも今一步というところで、突然、幸福な予感は消去り、私どもは、またしても、美しいけれども冷たい自然の横顔を見なければならぬのです。」と、また、別の弟子が続けた。「これも、まだ私どもの感覚の鍛錬が足りないか

らであり、心が深く潜んでいないからなのです。私どもはまだまだ努めなければなりません。やがては、師のいわれるように『観ることが愛することであり、愛することが創造することである』ような瞬間をもつことができるでしょうから。」

その間も、師の蒲衣子は一言も口をきかず、鮮緑の孔雀石を一つ掌にのせて、深い歎びを湛えた穏やかな眼差で、じつとそれを見つめていた。

悟浄は、この庵室に一月ばかり滞在した。その間、渠も彼らとともに自然詩人となって宇宙の調和を讃え、その最奥の生命に同化することを願うた。自分にとって場違いであるとは感じながらも、彼らの静かな幸福に惹かれたためである。

弟子の中に、一人、異常に美しい少年がいた。肌は白魚のように透きとおり、黒瞳は夢見るように大きく見開かれ、額にかかる捲毛は鳩の胸毛のように柔らかであった。心に少しの憂いがあるときは、月の前を横ぎる薄雲ほどの微かな陰翳が美しい顔にかかり、歎びのあるときは静かに澄んだ瞳の奥が夜の宝石のように輝いた。師も朋輩もこの少年を愛した。素直で、純粹で、この少年の心は疑うことを知らないのである。ただあまりに美しく、あまりにかぼそく、まるで何か貴い気体でもできてくるようで、それがみんなに不安なものを感じさせていた。少年は、ひまさえあれば、白い石の上に淡飴色の蜂蜜

を垂らして、それでひるがおの花を画かいていた。

悟浄ごじょうがこの庵室あんしつを去る四、五日前のこと、少年は朝、庵いおりを出たつきりでもどつて来なかつた。彼といつしよに出ていった一人の弟子は不思議な報告をした。自分が油断をしているひまに、少年はひよいと水に溶けてしまったのだ、自分は確かにそれを見た、と。他の弟子たちはそんなばかなことがと笑つたが、師の蒲衣子ほいしはまじめにそれをうべなつた。そうかもしれぬ、あの児こならそんなことも起こるかもしれぬ、あまりに純粹だつたから、と。

悟浄は、自分を取つて喰くおうとした鯰なますの妖怪ばけものの逞たくましさと、水に溶け去つた少年の美しさとを、並べて考えながら、蒲衣子のもとを辞した。

蒲衣子の次に、渠かれは斑衣はんい※婆けつばの所へ行つた。すでに五百余歳を経ている女怪じよかいだつたが、肌はだのしなやかさは少しも処女と異なるところがなく、婀娜あだたるその姿態は能く鉄石てつせきの心をも蕩とろかすといわれていた。肉の楽しみを極きわめることをもつて唯一の生活信条としていたこの老女怪は、後庭に房を連ねること数十、容姿端たんせい正な若者を集めて、この中に盈みたし、その楽しみに耽ふけるにあたつては、親昵しんじつをも屏しりぞけ、交遊をも絶ち、後庭に隠れて、昼を

もつて夜に継ぎ、三月に一度しか外に顔を出さないのである。悟浄の訪ねたのはちようどこの三月に一度のときに当たつたので、幸いに老女怪を見ることができた。道を求める者と聞いて、※婆は悟浄に説き聞かせた。ものうい懃れの翳を、嬋娟たる容姿のどこかに見せながら。

「この道ですよ。この道ですよ。聖賢の教えも仙哲の修業も、つまりはこうした無上法悦の瞬間を連続させることにその目的があるのですよ。考えてもごらんなさい。この世に生を享けるということは、実に、百千万億恒河沙劫無限の時間の中でも誠に遇いがたく、ありがたきことです。しかも一方、死は呆れるほど速やかに私たちの上に襲いかつてくるものです。遇いがたきの生をもつて、及びやすきの死を待っている私たちとして、いったい、この道のほかに何を考えることができるでしょう。ああ、あの痺れるような歓喜！ 常に新しいあの陶醉！」と女怪は酔つたように豔妖淫靡な眼を細くして叫んだ。

「貴方はお気の毒ながらたいへん醜いおかたゆえ、私のところに留まっていたかどうかとは思いませんから、ほんとうのことを申しますが、実は、私の後房では毎年百人ずつの若い男が困懃のために死んでいきます。しかしね、断わつておきますが、その人たちはみんな

喜んで、自分の一生に満足して死んでいくのですよ。誰一人、私のところへ留まったことを怨んで死んだ者はありません。今死ぬために、この楽しみがこれ以上続けられないことを悔やんだ者はありませんが。」

悟浄の醜さを憐れむような眼つきをしながら、最後に※婆はこうつけ加えた。

「徳とはね、楽しむことのできる能力のことですよ。」

醜いがゆえに、毎年死んでいく百人の仲間に加わらないで済んだことを感謝しつつ、悟浄はなおも旅を続けた。

賢人たちの説くところはあまりにもまちまちで、渠はまったく何を信じていいやら解らなかつた。

「我とはなんですか？」という渠の問いに対して、一人の賢者はこういった。「まず吼えてみる。ブウと鳴くようならお前は豚じゃ。ギャアと鳴くようなら鵝鳥じゃ」と。他の賢者はこう教えた。「自己とはなんぞやとむりに言い表わそうとさえしなければ、自己を知るのは比較的困難ではない」と。また、曰く「眼は一切を見るが、みずからを見ることのできない。我とは所詮、我の知る能わざるものだ」と。

別の賢者は説いた、「我はいつも我だ。私の現在の意識の生ずる以前の・無限の時を通じて我といつていたものがあつた。（それを誰も今は、記憶していないが）それがつまり今の我になつたのだ。現在の私の意識が亡びたのちの無限の時を通じて、また、我というものがあるだろう。それを今、誰も予見することができず、またそのときになれば、現在の私の意識のことを全然忘れているに違いないが」と。

次のように言つた男もあつた。「一つの継続した我とはなんだ？ それは記憶の影の堆積だよ」と。この男はまた悟浄にこう教えてくれた。「記憶の喪失ということが、俺たちの毎日していることの全部だ。忘れてしまつていることを忘れてしまつているゆえ、いろんなことが新しく感じられるんだが、実は、あれは、俺たちが何もかも徹底的に忘れちゃうからのことなんだ。昨日のことどころか、一瞬間前のことをも、つまりそのときの知覚、そのときの感情をも何もかも次の瞬間には忘れちまつてるんだ。それらの、ほんの僅か一部の、臃げな複製があとに残るにすぎないんだ。だから、悟浄よ、現在の瞬間をやつは、なんと、たいしたものじゃないか」と。

さて、五年に近い遍歴の間、同じ容態に違つた処方をする多くの医者たちの間を往復

するような愚かさを繰返したのち、悟淨ごじょうは結局自分が少しも賢くなっていなことを見
 いだした。賢くなるどころか、なにかしら自分がフワフワした（自分でないような）訳の
 分からないものに成り果てたような気がした。昔の自分は愚かではあっても、少なくとも
 今よりは、しつかりとした——それはほとんど肉体的な感じで、とにかく自分の重量を有も
 っていたように思う。それが今は、まるで重量のない・吹けば飛ぶようなものになってし
 まった。外そとからいろんな模様を塗り付けられはしたが、中味のまるでないものに。こいつ
 は、いけないぞ、と悟淨は思った。思索による意味の探索以外に、もつと直接的な解答こたえが
 あるのではないか、という予感もした。こうした事柄に、計算の答えのような解答を求め
 ようとした己おのれの愚かさ。そういうことに気がつきだしたころ、行く手の水が赤黒く濁つて
 きて、渠かれは目指す女じょう※氏のもとに着いた。

女じょう※氏は一見きわめて平凡な仙せん人にんで、むしろ迂愚うぐとさえ見えた。悟淨が来ても別に渠かれ
 を使うでもなく、教えるでもなかった。堅けん 疆きょうは死の徒と、柔にゅう 弱じやくは生の徒となれば、

「学ぼう。学ぼう」というコチコチの態度を忌まれたものようである。ただ、ほんのと
 きたま、別に誰に向かつて言うのでもなく、何か呟つぶやいておられることがある。そういうと

き、悟浄は急いで聞き耳を立てるのだが、声が低くてたいは聞きとれない。三月の間、渠はついになんの教えも聞くことができなかった。「賢者が他人について知るよりも、愚者が己について知るほうが多いものゆえ、自分の病は自分で治さねばならぬ」というのが、女※氏から聞きえた唯一の言葉だった。三月めの終わりに、悟浄はもはやあきらめて、暇乞いに師のもとへ行つた。するとそのとき、珍しくも女※氏は縷々として悟浄に教えを垂れた。「目が三つないからとて悲しむことの愚かさについて」「爪や髪の毛の伸長をも意志によつて左右しようとしなければ気が済まない者の不幸について」「酔うている者は車から墜ちても傷つかないことについて」「しかし、一概に考えることが悪いとは言えないのであつて、考えない者の幸福は、船酔いを知らぬ豚のようなものだが、ただ考えることについて考えることだけは禁物であるということについて」

女※氏は、自分のかつて識つていた、ある神智を有する魔物のことを話した。その魔物は、上は星辰の運行から、下は微生物類の生死に至るまで、何一つ知らぬことなく、深甚微妙な計算によつて、既往のあらゆる出来事を溯つて知りうるとともに、将来起こるべきいかなる出来事をも推知しうるのであつた。ところが、この魔物はたいへん不幸だつた。というのは、この魔物があるときふと、「自分のすべて予見しうる全世界の出来事

が、何故に（経過的でないかにしてではなく、根本的な何故に）そのごとく起こらねばならぬか」ということに想到し、その究極の理由が、彼の深甚微妙なる大計算をもつてしてもついに探し出せないことを見いだしたからである。何故向日葵は黄色いか。何故草は緑か。何故すべてがかく在るか。この疑問が、この神通力広大な魔物を苦しめ悩ませ、ついに惨めな死にまで導いたのであった。

女※氏はまた、別の妖精のことを話した。これはたいへん小さなみずぼらしい魔物だったが、常に、自分はある小さな鋭く光つたものを探しに生まれてきたのだと言っていた。その光るものとはどんなものか、誰にも解らなかつたが、とにかく、小妖精は熱心にそれを求め、そのために生き、そのために死んでいったのだ。そしてとうとう、その小さな鋭く光つたものは見つからなかつたけれど、その小妖精の一生はきわめて幸福なものだったと思われると女※氏は語った。かく語りながら、しかし、これらの話のもつ意味については、なんの説明もなかつた。ただ、最後に、師は次のようなことを言った。

「聖なる狂気を知る者は幸いじや。彼はみずからを殺すことよつて、みずからを救うからじや。聖なる狂気を知らぬ者は禍いじや。彼は、みずからを殺しも生かしもせぬことよつて、徐々に亡びるからじや。愛するとは、より高貴な理解のしかた。行なうとは、よ

り明確な思索のしかたであると知れ。何事も意識の毒汁どくじゅうの中に浸さずにはいられぬ憐あわれな悟浄よ。我々の運命を決定する大きな変化は、みんな我々の意識を伴わずに行なわれるのだぞ。考えてもみよ。お前が生まれたとき、お前はそれを意識しておったか？」

悟浄ごじょうは謹しんで師に答えた。師の教えは、今ことに身にしみてよく理解される。実は、自分も永年の遍歴の間に、思索だけではますます泥沼どろぬまに陥るばかりであることを感じてきたのであるが、今の自分を突破つて生まれ変わることができずに苦しんでいるのである。それを聞いて女じょう※氏は言った。

「溪流たながいが流れて来て断崖だんがいの近くまで来ると、一度渦巻うずまきをまき、さて、それから瀑布ばくふとなつて落下する。悟浄よ。お前は今その渦巻の一步手前で、ためらっているのだな。一步渦巻にまき込まれてしまえば、那落ならくまでは一息。その途中に思索や反省や低徊ていかいのひまはない。臆病おくびょうな悟浄よ。お前は渦巻うずまききつつ落ちて行く子どもを恐れと憐れあわれみとをもつて眺めながめながら、自分も思い切つて飛込もうか、どうしようかと躊躇ちゅうちよ躊躇ちよしているのだな。遅かれ早かれ自分は谷底に落ちねばならぬとは十分に承知しているくせに。渦巻うずまきにまき込まれないからとて、けつして幸福ではないことも承知しているくせに。それでもまだお前は、傍觀者の地位に恋々れんれんとして離れられないのか。物凄ものすごいい生の渦巻の中で喘あえいでいる

連中が、案外、はたで見ると不幸ではない（少なくとも懷疑的な傍観者より何倍もしあわせだ）ということをも、愚かな悟浄よ、お前は知らないのか。」

師の教えのありがたさは骨髓こつずいに徹して感じられたが、それでもなおどこか釈然しやくぜんとしな
いものを残したまま、悟浄は、師のもとを辞した。

もはや誰にも道を聞くまいぞと、渠かれは思った。「誰も彼も、えらそうに見えたって、実は何一つ解わかつてやしないんだな」と悟浄は独ひとりごと言ことを言いながら帰途についた。「『お互いに解つてふりをしようぜ。解つてやしないんだってことは、お互いに解り切つてるんだから』という約束のもとにみんな生きているらしいぞ。こういう約束がすでに在るのだとすれば、それをいまさら、解らない解らないと言つて騒ぎ立てる俺は、なんとという氣の利きかない困りものだろう。まったく。」

五

のろまで愚図ぐずの悟浄ごじようのことゆえ、翻然ほんぜんたいいご大悟だいとか、大活だいかつ現前げんぜんとかいった鮮あぎやかな芸当げんぎを見せることはできなかつたが、徐々に、目に見えぬ変化が渠かれの上に働いてきたよう

である。

はじめ、それは賭けをするような気持であった。一つの選択が許される場合、一つの途が永遠の泥潭であり、他の途が険しくはあつてもあるいは救われるかもしれないのだとすれば、誰しもあとの途を選ぶにきまつている。それだのになぜ躊躇していたのか。そこで渠ははじめ、自分の考え方の中にあつた卑しい功利的なものに気づいた。峻しい途を選んで苦しみ抜いた揚句に、さて結局救われなくなつたら取返しのない損だ、という気持が知らず知らずの間に、自分の不決断に作用していたのだ。骨折り損を避けるために、骨はさして折れない代わりに決定的な損亡へしか導かない途に留まろうというのが、不精で愚かで卑しい俺の気持だったのだ。女※氏のもとに滞在している間に、しかし、渠の気持も、しだいに一つの方向へ追詰められてきた。初めは追詰められたものが、しまいにはみずから進んで動き出すものにならうとしてきた。自分は今まで自己の幸福を求めてきたのではなく、世界の意味を尋ねてきたと自分では思っていたが、それはとんでもない間違いで、実は、そういう変わった形式のもとに、最も執念深く自己の幸福を探していたのだということが、悟淨に解りかけてきた。自分は、そんな世界の意味を云々するほどたいした生きものでないことを、渠は、卑下感をもつてでなく、安らかな満足感をも

って感じるようになった。そして、そんな生意気をいう前に、とにかく、自分でもまだ知らないでいるに違いない自己を試み展開してみようという勇気が出てきた。躊躇する前に試みよう。結果の成否は考えずに、ただ、試みるために全力を挙げて試みよう。決定的な失敗に帰したつていいのだ。今までいつも、失敗への危惧から努力を抛棄していた渠が、骨折り損を厭わないところにまで昇華されてきたのである。

六

悟浄の肉体はもはや疲れ切っていた。

ある日、渠は、とある道ばたにぶつ倒れ、そのまま深い睡りに落ちてしまった。まったく、何もかも忘れ果てた昏睡であった。渠は昏々として幾日か睡り続けた。空腹も忘れ、夢も見なかった。

ふと、眼を覚ましたとき、何か四辺が、青白く明るいことに気がついた。夜であった。明るい月夜であった。大きな円い春の満月が水の上から射し込んできて、浅い川底を穏やかな白い明るさで満たしているのである。悟浄は、熟睡のあとのさっぱりした気持で起上

がつた。とたんに空腹に気づいた。渠はそのへんを泳いでいた魚類を五、六尾手掴みにし
 てむしやむしや頬張り、さて、腰に提げた瓢の酒を喇叭飲みにした。旨かった。ゴクリゴ
 クリと渠は音を立てて飲んだ。瓢の底まで飲み干してしまふと、いい気持で歩き出した。
 底の真砂の一つ一つがはつきり見分けられるほど明るかった。水草に沿うて、絶えず小
 さな水泡の列が水銀球のように光り、揺れながら昇つて行く。ときどき渠の姿を見て逃
 す小魚どもの腹が白く光つては青水藻の影に消える。悟浄はしだいに陶然としてきた。
 柄にもなく歌が唱いたくなり、すんでのことに、声を張上げるところだった。そのとき、
 ごく遠くの方で誰かの唱っているらしい声が耳にはいつてきた。渠は立停まって耳をすま
 した。その声は水の外から来るようでもあり、水底のどこか遠くから来るようでもある。
 低いけれども澄透った声ではそぼそと聞こえてくるその歌に耳を傾ければ、

こつこくのしゆんふうふきたたず

江国春風吹不起

しやこないてしんかのうちにあり

鷓鴣啼在深花裏

さんきゆうなみたこうしてうおりゆうにかす

三級浪高魚化竜

ちじんなおくおせとうのみず
痴人猶※夜塘水

どうやら、そんな文句のようでもある。悟浄はその場に腰を下ろして、なおもじつと聴入った。青白い月光に染まった透明な水の世界の中で、単調な歌声は、風に消えていく狩りの角笛の音のように、ほそぼそといつまでもひびいていた。

寐たのでもなく、さりとして覚めていたのでもない。悟浄は、魂が甘く疼くような気持で茫然と永い間そこに蹲っていた。そのうちに、渠は奇妙な、夢とも幻ともつかない世界にはいつて行つた。水草も魚の影も卒然と渠の視界から消え去り、急に、得もいわれぬ蘭麝の匂いが漂うてきた。と思うと、見慣れぬ二人の人物がこちらへ進んで来るのを渠は見た。

前なるは手に錫杖をついた一癖ありげな偉丈夫。後ろなるは、頭に宝珠瓔珞を纏い、頂に肉髻あり、妙相端嚴、仄かに円光を負うておられるは、何さま尋常人ならずと見えた。さて前なるが近づいて言つた。

「我は托塔天王の二太子、木叉恵岸。これにいますはすなわち、わが師父、南海の觀世音菩薩、摩訶薩じや。天竜・夜叉・乾闥婆より、阿脩羅・迦楼羅・緊那羅・摩羅伽・人・非人に至るまで等しく憫れみを垂れさせたもうわが師父には、このたび、爾、

悟浄が苦惱をみそなわして、特にここに降つて得度したもうのじや。ありがたく承るがよい。」

「覚えず頭を垂れた悟浄の耳に、美しい女性的な声——妙音というか、梵音というか、海潮音というか、——が響いてきた。

「悟浄よ、諦かに、わが言葉を聴いて、よくこれを思念せよ。身の程知らずの悟浄よ。いまだ得ざるを得たりといいいまだ証せざるを証せりと言うのをさえ、世尊はこれを増上慢とて難ぜられた。さすれば、証すべからざることを証せんと求めた爾のごときは、これを至極の増上慢といわずしてなんといおうぞ。爾の求むるところは、阿羅漢も辟支仏もいまだ求むる能わず、また求めんともせざるところじや。哀れな悟浄よ。いかにして爾の魂はかくもあさましき迷路に入ったぞ。正観を得れば淨業たちどころに成るべきに、爾、心相羸劣にして邪観に陥り、今この三途無量の苦惱に遭う。惟うに、爾は観想によつて救わるべくもないがゆえに、これよりのちは、一切の思念を棄て、ただただ身を働かすことによつてみずからを救おうと心がけるがよい。時とは人の作用の謂じや。世界は、概観によるときは無意味のごとくなれども、その細部に直接働きかけるときはじめて無限の意味を有つのじや。悟浄よ。まずふさわしき場所に身を置き、ふさわ

しき働きに身を打込め。身の程知らぬ『何故』は、向後一切打捨てることじゃ。これをよそにして、爾の救いはないぞ。さて、今年の秋、この流沙河を東から西へと横切る三人の僧があらう。西方金蟬長老の転生、玄奘法師と、その二人の弟子どもじゃ。唐の太宗皇帝の綸命を受け、天竺国大雷音寺に大乘三蔵の真経をとらんとて赴くものじゃ。悟浄よ、爾も玄奘に従うて西方に赴け。これ爾にふさわしき位置にして、また、爾にふさわしき勤めじゃ。途は苦しかりうが、よく、疑わずして、ただ努めよ。玄奘の弟子の一人に悟空なるものがある。無知無識にして、ただ、信じて疑わざるものじゃ。爾は特にこの者について学ぶところが多かるうぞ。」

悟浄がふたたび頭をあげたとき、そこには何も見えなかつた。渠は茫然と水底の月明の中に立ちつくした。妙な気持である。ぼんやりした頭の隅で、渠は次のようなことをとりとめもなく考えていた。

「……そういうことが起こりそうな者に、そういうことが起こり、そういうことが起こり、そうなきに、そういうことが起こるんだな。半年前の俺だつたら、今のようなおかしな夢なんか見るはずはなかつたんだがな。……今の夢の中の菩薩の言葉だつて、考えてみりや、女※氏や蚪髯鮎子の言葉と、ちつとも違つてやしないんだが、今夜はひどく身に

こたえるのは、どうも変だぞ。そりや俺だつて、夢なんか救済すくになるとは思ひはしないさ。しかし、なぜか知らないが、もしかすると、今の夢のお告げの唐僧とうそうとやらが、ほんとうにここを通るかもしれないというような気がしてしかたがない。そういうことが起りそうなきには、そういうことが起るものだというやつでな。……」

渠はそう思つて久しぶりに微笑した。

七

その年の秋、悟浄ごじょうは、はたして、大唐だいとうの玄奘げんじょう法師ほうしに値遇ちぐうし奉り、その力で、水から出て人間となりかわることができた。そうして、勇敢ゆうかんにして天真てんしん爛漫らんまんな聖天せいてん大聖だいせい孫悟空そんごくうや、怠惰たいだな樂天家らくてんか、天蓬てんぼう元帥げんすい猪悟能ちよごのうとともに、新しい遍歴へんれきの途に上ることとなつた。しかし、その途上でも、まだすっかりは昔の病の脱ぬけ切つていない悟浄は、依然として独り言の癖くせを止めなかつた。渠かれは眩くらいた。

「どうもへんだな。どうも腑ふに落ちない。分からないことを強しいて尋ねようとしなくなる。ことが、結局、分かつたということなのか？ どうも曖昧あいまいだな！ あまりみごとな脱皮だつぴ

ではないな！　フン、フン、どうも、うまく納^な得^{とく}がいかぬ。とにかく、以前ほど、苦にならなくなったのだけは、ありがたいが……。」

——「わが西遊記」の中——

青空文庫情報

底本：「李陵・山月記・弟子・名人伝」角川文庫 角川書店

1968（昭和43）年9月10日改版初版発行

1998（平成10）年5月30日改版52版発行

入力：佐野良二

校正：松永正敏

2001年3月16日公開

2011年3月20日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

悟浄出世

中島敦

2020年 7月17日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>